CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kwansei Gakuin University Repository

J. ウェスレーの霊性とリーダーシップについて [1]

－小グループ組織を中心に－

趙　　永哲

はじめに

18 世紀に J. ウェスレーを中心として発展したメソジスト信仰復興運動は、当時のイギリス社会だけでなく、世界のキリスト教の歴史においても大きな影響を与えた。その背後には、ウェスレーの霊性と彼のリーダーシップがある。しかし、これまでウェスレーの神学に関する研究は多くなされてきたが、メソジスト信仰復興運動と牧会者として彼のリーダーシップとの関連について言及した研究は少ない。さらに、従来のウェスレーのリーダーシップに関する研究は一般的な叙述にとどまり、当時ウェスレーが組織し、導いていた小グループの組織におけるリーダーシップについては論述されていない [2]。

メソジストあるいはウェスレーの霊性 [3] について論じる時、いろいろな立場がある。特に本研究において強調したいのは、ウェスレーの霊性に見られる独自の「体系的な小グループ」という組織の霊性と、その小グループという組織における彼のリーダーシップである。また、ウェスレーのリーダーシップについて語る時、野外説教による福音宣教の情熱とそれを管理・養育するために作られた様々な小グループの組織が重要な事柄となる。

本論文は、ウェスレーの霊性に関するこれまでの研究を踏まえて、主に小グループ

---

(1) 本論文は、日本基督教学会近畿支部会 (2009 年 3 月 23 日、関西学院大学) において発表され、『神学研究』の掲載のため、多少の加筆訂正が加えられている。

(2) Lovett H. Weems, Jr., *Leadership In The Wesleyan Spirit*, Nashville :Abingdon Press, 1999. この書物の中で著者はウェスレーアン伝統のリーダーシップの原理や実践、情熱などについて語っているが、それはウェスレー自身よりもウェスレーの精神を受け継いでいる現代メソジスト信徒のための一般的 (大雑把) なリーダーシップの案内書に過ぎない。

(3) メソジストあるいはウェスレーの霊性についての基本的な文献は、John Wesley, *A Plain Account of Christian Perfection*, London : Epworth press, 1952 (1987printing) (以　下、Plain Account), Robin Maas, Wesleyan Spirituality, in Robin Maas and Gabriel O'Donnell eds., *Spiritual Traditions for the Contemporary Church*, Abingdon Press/Nashville, 1990, pp.303-319., Frank Whaling ed., The Classics of Western Spirituality, *John and Charles Wesley*: Selected Writings and Hymns, New York: Paulist, 1981., David Lowes Watson, Methodist Spirituality, Kenneth J. Collins ed., *Exploring Christian Spirituality*, Baker Books, 2000 などがある。また、拙稿「J. ウェスレーの社会的霊性に関する一考察」、『神学研究』(52 号)、関西学院大学神学研究会、2005 年、195-205 頁、そして拙稿「ウェスレーの小グループにおけるメソジストの霊性について」『ウェスレー・メソジスト研究』、日本ウェスレー・メソジスト学会、教文館、2007 年、81-101 頁を参照。

組織におけるウェスレーの霊性とリーダーシップについて考察するものである。そのため、まずウェスレーによるメソジスト小グループの歴史的な経緯や構成について述べ、次に霊性訓練及び彼のリーダーシップの道具としての小グループ、とりわけ組会と班会を中心に考察することにする。その後、小グループ組織においてウェスレーが追求した霊性とその中に発揮されたリーダーシップについて論究を進めていく。このような流れを通して、小グループ組織においてウェスレーが体験した霊性とリーダーシップを実践神学的な観点から明らかにすることが、本論文の目的である。

Ⅰ．ウェスレーの小グループ組織：その歴史的な経緯と構成

18 世紀イギリスでウェスレーを中心にメソジスト信仰復興運動が起こる前に、既にヨーロッパの大陸には敬虔主義 (Pietism)(4) の波があった。ドイツを中心に起こったこの敬虔主義は、シュペーナー (Philipp Jakop Spener, 1635-1705) によって始められ、敬虔主義に大きな貢献を残したフランケ (August Hermann Franke, 1663-1727)、そしてウェスレーに大きな影響を与えるモラビアンのツィンツェンドルフ (Ludwig von Zinzendorf, 1700-1760) などが中心となり、特にシュペーナーのエクレシオラエ・イン・エクレシア (ecclesiolae in ecclesia)(5)、即ち Collegia pietatis(6) 運動はその後、モラビア派の指導者ツィンツェンドルフに受け継がれた経緯からウェスレーの小グループ運動に大きな影響を与えている。

もう一つウェスレーの小グループ組織に大きな影響を与えたのは、同じイギリスにおける敬虔運動の組織として A. ホーネック (7)(Anthony Horneck, 1641-1697) を中心に組織された英国国教会内の宗教ソサエティー (The Religious Society)(8) である。ホーネックによって 1670 年代に始められた宗教ソサエティーは信徒たちが集る小グルー

(4) この敬虔主義に関しては、Louis Bouyer, *Orthodox Spirituality and Protestant and Anglican Spirituality*, The Seabury Press, 1969, p.p.169-184 と Henderson D. Michael, *John Wesley's Class Meeting*, p.51、そして Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists*, Nashville : Abingdon Press, 1995, p.19 などを参照。

(5) Collegia pietatis、即ち「教会内の小さな教会」(little churches within the church) とも呼ばれるこの用語は、ドイツの敬虔主義者シュペーナーからフランケ、ツィンツェンドルフ、そしてウェスレーに受け継がれる概念である。

(6) Ecclesiolae in ecclesia もしくは、little churches within the church.

(7) ホーネックはドイツの出身でハイデルベルク大学とヴィッテンベルク大学で学び、1661 年 20 歳の時からイギリスに定着し、オックスフォード大学で学んだ後、英国国教会で聖職の按手を受けた。彼は敬虔主義神学者として有名であり、特に若い知識人たちに人気があった。彼の敬虔主義信仰はドイツ敬虔主義の影響より、オックスフォード大学で初代教会と教父たちの影響、特に英国国教会に対する魅力によって形成されたものであると思われる。彼はロンドンにあるサボイ教会 (Savoy Chapel) で長い間牧会をしながら英国国教会の中で敬虔主義運動の指導者として重要な役割を果たした。Gordon Rupp は彼のこのような敬虔主義を英国国教会の伝統から出て来た一種の実践神学 (practical divinity) と言う。Gordon Rupp, *Religion in England 1688-1791*, Oxford: Clarendon Press, 1986, p.290-291 を参照。

(8) このような宗教ソサエティーに関しては、Gordon Rupp, ibid を参照。

プであったが、彼らには道徳主義と敬虔主義がほぼ自然に調和されており、20 年以内にこのような宗教ソサエティーは、英国国教会の構造の中においてキリスト的な敬虔と社会的な関心を示す活発な表現手段として現れたのである [(9)]。ホーネックがウェスレーに与えた最も大きな影響は、宗教ソサエティーを通して貧しい者や寡婦・孤児を世話する社会への実践的な活動においてであった [(10)]。このような宗教ソサエティー運動は、1698 年にトマス・ブレイ (Thomas Bray) によって設立された「キリスト教知識普及協会」(the Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK) のような中央主権的な組織を立てることとなり、これは英国全地域の地方において点在していた諸組織にモデルと励ましとなった。このような宗教ソサエティーにはウェスレーの父であるサムエルが直接携わり、後にウェスレーにも影響を与えることになる [(11)]。また、その姉妹関係のグループ (sister group) として、1701 年に同じくブレイによって創設された「海外福音伝道会」(The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, SPG) がある [(12)]。特にウェスレーの父サムエルは SPCK の強力な後援者で、1702 年に自分の教区エプワスで、この宗教ソサエティーを始めている。ウェスレー自身も、1732 年にオックスフォードにいる間、SPCK の会員になっており、このような宗教ソサエティーと小グループ運動の関わりがホーリークラブの発展に結びついたと言われている [(13)]。

このような宗教ソサエティー運動は、メソジスト運動が起こる 1730 年代に衰退し始めるが、宗教ソサエティー運動はメソジストの小グループ運動の先駆者的な役割を果たしており、メソジスト信仰共同体が生まれる土壌となったと言えるであろう。

こうした歴史的な背景の下で、ウェスレーの小グループが組織される契機は、ホイットフィールド (George Whitefield) とジョン・ウェスレーなどが中心に起こした野外説教から始まる。ウェスレーは既に、1739 年 2 月ブリストルで野外説教を行っていたホイットフィールドの誘いによって同年 4 月、野外説教を始めることになる。

ウェスレーは、野外説教による大衆伝道を通して得た多くの回心者たちのためにメ

---

(9) Richard P. Heitzenrater, op.cit.,p.21.

(10) Hunsicker, David., John Wesley: Father of Today's Small Group Concept?, *Wesleyan Theological Journal*, v.31, no.1, Spring, 1996, pp.195-196.

(11) ウェスレーの父サムエル・ウェスレーは、当時ホーネックを中心に英国国教会の中にあった宗教ソサエティー運動に影響され、ウェスレーが生まれる 2 年前である 1701 年に自分の教区に Epworth Society を組織した。そして、その子 J. ウェスレーがこの SPCK の通信会員であった事実もメソジストと呼ばれる原因となるのである。Richard P. Heitzenrater, op.cit.,p.21.

(12) Rupert E. Davies eds. *The Works of John Wesley* (Bicentennial Edition, 以下 BE), vol. 9, Nashville : Abingdon, 1989, p.4.　この SPCK や SPC を小グループと言い難い面があるが、それらの宗教ソサエティーはウェスレーの小グループ運動に影響を与えたのは確かである。実際に、ウェスレーが 1735 年ジョージアへ行ったのは、海外福音伝道会（SPG）から宣教師として派遣されたのである。Hunsicker, David., John Wesley: Father of Today's Small Group Concept? 196 頁の註を参照。

(13) Hunsicker, David., op.cit., p.196 の註 11 を参照。

ソジスト・ソサエティーを組織し、彼らを多様な小グループの中で霊的に養育・訓練していった。つまり、ウェスレーの信仰復興運動の成長と共に、信徒の数が急増した。彼らを信仰的に教育し、宣教活動へと促す教会内の小さなグループとして、ドイツ敬虔主義者シュペーナーの影響とも言えるエクレシオラエ・イン・エクレシア (教会内の小さな教会) が形成された。ウェスレーによって創立された教会内の組織とは、具体的にメソジスト・ソサエティー (Methodist Society)、組会 [14](Class Meeting)、班会 [15](Band)、選抜ソサエティー (Selected Society)、懺悔会 (Penitent Bands) などを挙げることが出来る。ウェスレーによるこれらの組織は、指導者ウェスレーを頂点にピラミッドのような機構である。言い換えれば、すべてのメソジスト会員はメソジスト・ソサエティーに属すべきであり、組会はすべてのメソジスト会員がその責務として参加するようになった小グループである。さらに、メソジストの組織は、罪の赦しを願っている人々のための小グループである班会、神の助けによって歩み、キリスト者の完全に向うように励まし合う人々のための選抜ソサエティー、そして恵みから離れる不幸を体験したが、新たな者になることを願っている人々のための集いである懺悔会を包摂している [16]。ウェスレーは、このような諸組織を通してメソジストに属していた会員たちを霊的に指導していたのであり、これらの諸組織は、訓練するための組織としてウェスレーの指導の下で互いに繋がっている連結体系 (Connexion) である。これらの組織の形成と発展において、信仰の目標（完全な聖化）に向かう確かな哲学や責任を持っていたウェスレーは、常に会員たちの霊的な訓練及び点検、そして具体的なケア等によってリーダーシップを発揮していた。その中でも、組会と班会はウェスレーの代表的な小グループ組織であり、彼自身のリーダーシップが顕著に発揮された活動である。

野外説教により膨大な数の人々が霊的な覚醒を体験し、その数も規模も拡大していた。ウェスレーは、福音に触れ、救われた人々を互いに見守るためメソジスト・ソサエティーを形成するようになる。このソサエティーは、次第にイギリスの全地域の人々に公平に門戸を開き、また会員の数が増加することに従い、連合ソサエティー (united

(14) 組会に関する代表的な著作としては、Watson, David Lowes, *The Early Methodist Class Meeting : It's Origins and Significance* と Henderson D. Michael, *John Wesley's Class Meeting : A Model for Making Disciples* などがある。これ以上の組会についての書物については、Howard A. Snyder, *The Radical Wesley & Pattern for Church Renew*, 1 章の 5（New Wineskins）註 29（175 頁）を参照。

(15) 班会に関しては、Henderson D. Michael, *John Wesley's Class Meeting* と John S. Simon, *John Wesley and the Methodist Societies*, London : Epworth, 1923 を参照。特に、班会の規則については、BE., vol. 9, pp. 77-79 を参照。この班会の規則は既に 1738 年 12 月の初め頃に制定されており、追加の指針は 6 年後である 1744 年に立てられる。Wesley. John (by), Thomas Jackson (ed.), *The Works of the Rev. John Wesley* (以下 *The Works*), vol. Ⅷ , London : Wesleyan Methodist Book Room, 1872 (Reprinted 1984 by Baker Book House Company), p.272-274.

(16) Kenneth J. Collins, *A Real Christian*: The life of John Wesley, Nashville : Abingdon Press, 1999, p.p.81-82.

society)[17] を組織することになる。このメソジスト・ソサエティーに入会する条件は、ただ「来るべき御怒りを避け、罪から救われたいという願望を持っていること」[18] であったが、その後、メソジストであり続けるために、様々な規則が与えられ、入会後に「救われたい」という願望を真実に生きることが求められていた。それ故、H.A. スナイダーは、このように一つの単純な条件を持っているメソジスト・ソサエティーは入会するのに一番簡単でありながら、継続するのが難しいグループであると指摘している [19]。

一方、ウェスレーによるメソジスト・ソサエティーとその当時英国国教会に属していた宗教ソサエティー [20] との重要な差は、メソジスト・ソサエティーはウェスレーの直接的な監督の下に置かれており、主にメソジストの会員たちを中心に形成されていた点である [21]。これこそ、メソジスト・ソサエティー組織の特徴であり、ウェスレーのリーダーシップの中身である連結体系として未だに英国メソジスト教会に残っている。

ウェスレーが小グループを創設した発端は、1742 年にブリストルでメソジスト・ソサエティーの集会所 (New Room)[22] を建築した際、その負債を会員各々が週一ペニーを献げることでまかなうことを提案したことである。そこでソサエティーを 12 人単位の小グループに分割し、各々グループのメンバーを回って集金するためにリーダーが立てられた [23]。このシステムは、大きくなったソサエティーの中で本来の目的である信仰の交わりや霊性訓練、ケアなどを実現する組会 (Class meeting) として発展した。1746 年頃までにはウェスレーに関わるソサエティーすべてに定着し、メソジスト運動の基本単位となった。ウェスレーの小グループの組織は、この組会の他にモラビア派の方式から習ったものとして年齢や性別、既婚未婚に従って分けられ、さらに緊密な交わりである班会 (Band) や選抜ソサエティー (selected societies) などが組織された。このような組織は、メソジストの中でも霊的な訓練、交わり、告白などを通して霊性を深めていくための小グループにほかならない。

---

(17) これはメソジスト・ソサエティー自体が単立（単独）では存在しないこと、言い換えればこれは後に出て来る「連結体系」(connexion) を意味する。

(18) Wesley. John(by), Rupert E. Davies(ed.), *The Works of John Wesley* (以下、BE. vol. 9; The Methodist Societies History, Nature and Design), Nashville : Abingdon Press, 1989, p.70.

(19) Howard A. Snyder, *The Radical Wesley & Pattern for Church Renew*, Illinois: Inter- varsity Press, 1980, p.35.

(20) これらの宗教ソサエティーは当時ロンドンだけでも 40 以上あり、既に述べて来たようにウェスレーの父サムエル・ウェスレーもウェスレーが生まれる 2 年前である 1701 年に自分の教区に Epworth Society を組織した点から見ると、この宗教ソサエティーがウェスレーの小グループの運動に影響を与えたのは確かであろう。

(21) Howard A. Snyder, op. cit., p.35.

(22) 何よりもこの New Room が意味あるのは、ウェスレーの小グループである組会を最初に始めたことである。

(23) BE., vol. 9, pp. 260-261.

Ⅱ．霊性訓練及びリーダーシップの道具としての小グループ（組会と班会を中心に）

これまでウェスレー小グループの歴史的な経緯と構成について述べて来た。メソジスト・ソサエティーは、大きく組会と班会に分けられる。それ故、ここではウェスレーの代表的な小グループの組織である組会と班会を中心に考察することにしたい。

先ず、メソジストの信仰復興運動は教会から始まったのではなく、小グループである組会から始まった。メソジスト小グループ運動の革命的な組織 (24) であった「組会」は、ブリストルで必要に応じて偶然に組織されたものであり、1742 年にはロンドンにおいても始められ、1745 ～ 46 年にはメソジストの典型的なパータンとして全域に広がるようになったのである (25)。通常この組会は週に一度、約一時間の割で持たれ、メンバー各々が霊的な進歩や日常生活の問題を報告し合い、祈りや具体的な支援を受けていた。この「組会」は、メソジスト・ソサエティーに属するすべてのメンバーなら誰でも所属することができるものであり、ウェスレーの独創的なものであった。初期には単純な目的で始められたこの組会は、次第にその構成員たちにより多様性を帯び、様々な霊性の経験を踏まえメソジスト特有の霊性的な組織として発展していったのである。そういう意味において、「組会」は個人的な霊性を訓練する場所でありながら、同時に共同体的な敬虔や交わりを共に経験する説明責任と信徒リーダーの重要性を強調するものであり、これこそウェスレーのリーダーシップによって発展していくのである。

次に、モラビア派から最も直接に影響され組織されたと言える小グループとしての「班会」は、メソジスト・ソサエティーの核心的な組織であると言うことができる。ウェスレーはアルダスゲイトの回心後、モラビア派の信仰を学ぶために彼らの本拠地ヘルンフート (Herrnhut) を訪れ、そこでいろいろな班会が運営されていることを見た。帰って来てウェスレーは、ベイカーが指摘しているように、ベーラーと共に 1738 年 5 月 1 日に創設したフェターレイン・ソサエティーを含めて、ロンドンにあるすべての宗教ソサエティーのためにこの班会の組織化を強く主張した (26)。これは年齢や性差、結婚の有無などを考慮して構成された組織であった。班会の規則 (27) や訓練はかなり厳しいため、メソジスト・ソサエティーに属している全員が組会の会員であったのに対し、この班会のメンバーは全体の 20％ほどであった。また、組会が 12 人ほど

(24) Henderson D. Michael, op.cit., p.11.
(25) John S. Simon, op.cit., p.312.
(26) Frank Baker, *John Wesley and the Church of England*, London: Epworth press, 2000, p.141.
(27) BE., vol. 9, pp. 77-79 を参照。この規則はメソジスト・ソサエティーや組会が組織される前である 1738 年 12 月に既に制定されていた。

の会員たちの信仰の訓練が目的であったのに対して、班会は平均 6 人ほどのメンバーから成り立ち、集うたびに「罪を告白し合う」[28]、言わば回心した者たちの霊的な前進を目的としたものであった [29]。班会において、すべての会員は自分の霊的な状態を隠さず告白し、互いに霊的な説明責任を果たしていた。この組織は、愛と聖、意図の純粋さにおいて信仰的に成長することを願って献身しようとする人々の自発的な集いであった [30]。

ウェスレーはこれらの組会や班会などの小グループを通して、会員たちの個人的な霊性の訓練だけでなく、共同体による信仰的な交わり、さらに外へと展開するリーダーシップを発揮したのである。

Ⅲ. 小グループ組織におけるウェスレーの霊性とリーダーシップについて

ウェスレーは、小グループ組織をメソジスト・ソサエティーにおいてメンバーたちの霊性の訓練として用いるだけでなく、その中で自分の具体的なリーダーシップを発揮している。ここでは、ウェスレーの小グループ組織においてその霊性とリーダーシップの主な内容である説明責任と連結体系、霊的な指導者としての牧会的なケア、信徒指導者の養成を中心に考察していくことにする。

1. 説明責任 (Accountability)

「説明責任」とは、神に委ねられたそれぞれのタラントをその管理者となった者が、常にその主人の前で説明できる状態にしておくことがキリスト者に課せられたものである [31]。

ウェスレーがキリスト者として単純な霊的訓練からこの「説明責任」[32] に目覚めた契機は、1725 年 [33] に 23 歳で彼自身が国教会の司祭補 (deacon) になった時、ドイ

(28) 班会のメンバーたちは集うたびにヤコブの手紙 5：16 に基づき、次の五つの霊的な質問に対し告白しなければならなかった。それらは、1. あなたは、前の集会以後、どんな罪を犯したのですか？ 2. あなたはどんな誘惑を受けたのですか？ 3. どのようにして、あなたはその誘惑から逃れたのですか？ 4. あなたは自分が考えたことや言ったこと、行なったことの中で、それが罪であるかどうか、疑うべきものがあったのですか？ 5. あなたは隠したい秘密を持っているのですか？などである。BE. v.9, p.78.

(29) Howard A. Snyder, op.cit., p. 60.

(30) Henderson D. Michael, op.cit., p.112.

(31) 藤本満「ウェスレーによる人間形成論」『キリスト教と人間形成』：ウェスレー誕生 300 年記念、青山学院大学総合研究所 キリスト教文化研究センター編、2004 年、155 頁。

(32) これに関しては、上掲書、156 頁以下の「ディシプリンからアカウンタビリティーへ」を参照。

(33) ところが、この時期に関してはウェスレー自身の表現さえ一貫性がない。例えば、ウェスレーは自分の回心日であった 1738 年 5 月 24 日の日記において、1725 年 22 歳の時、トマス・ア・ケンピスの著書を読み、感動を受けたと記しているが〔BE, vol.18 (Journal and diaries), p. 243., Wesley. John, W. Reginald Ward, Richard P. Heitzenrater eds., Nashville : Abingdon, 1988〕後の著作『キリスト者の完全に関する平易な解説』では 1726 年に読んだと記述している (*Plain Account*, p.5)。

ツの神秘主義者トマス・ア・ケンピスの『キリストに倣いて』(Imitatio Christi) と主教ジェレミー・テイラーの『聖なる生と死の規則と実践』(Rule and Exercises of Holy Living and Holy Dying) などの書物との出会いであり、その書物により自分の全生涯を神に捧げることを決心したのである [34]。これらの書物を通して、ウェスレーは自分の心と生活のすべてが神の前で「説明責任」を課せられた存在であることを悟る。さらに、その年の 4 月 5 日から日記を書く習慣を始めるようになり、死ぬ一週間前までの 66 年間日記を書き続けたのである。

この説明責任をウェスレーが小グループ運動に適用したのは、1729 年にオックスフォード大学でその仲間たちと共にホーリークラブ [35] に携わる時であった。ウェスレーを中心としたホーリークラブのメンバーたちは、互いに自分の問題を告白し合い、時には日記を交換し合って読み、互いの問題を指摘しつつ励まし支え合った。このことによって、自分がいかに神の恵みを無駄にせず、神の御旨に即して生きているのかを、神の御前だけでなく、友達や仲間の前でも問われていることを悟るのである。さらに、小グループの中で互いを責任ある存在と見做し、互いの行動と生活を見守りながら、自らの責任説明を神の御前に、そして互いの前で果たしていった。これがまさにウェスレーによるメソジストの説明責任であり、その中に彼の霊的なリーダーシップが現れているのである。ワトソンは、メソジスト的霊性の構造として、相互の説明責任 (Mutual Accountability) を持つ小グループの組会を始め、恵みの普遍性、完全に向かう道、恵みの手段、讃美などを挙げているが [36]、ウェスレーはメソジスト運動が本格的となった 1739 年 4 月の野外説教以後から、具体的なメソジストの小グループを通して、互いに果たすべき霊的な説明責任を展開していったのである。互いに果たすべき説明責任なしに、キリスト者としての成長はないという原則を具体的な形にしたのが、メソジストの代表的な小グループである組会であり班会である。まさに、この説明責任を通して小グループにおける会員たちを霊的に導いたウェスレーの霊性とリーダーシップが具現化したのである。

また、日記にはテイラーについての言及がないが、*Plain Account* ではテイラーの本をア・ケンピスより一年前に読んだと記している。この件に関して、私はウェスレーの若い時の状況を比較的に詳しく描いているラック（Rack）の見解、即ち 1725 年 5 月にはア・ケンピスの書物を、そして同年 6 月にはテイラーの書物を、さらにローの書物は 1730 年末に読んだという考えに従う (Henry D. Rack, *Reasonable enthusiast : John Wesley and the rise of Methodism, London*: Epworth Press, 1989, p.73)。

(34) Thomas Jackson ed., *The Works of John Wesley* (以下 Works) Michigan : Baker Book House, 1984, vol.11, p.366.

(35) この集いは、最初はウェスレーの弟チャールズを中心に 3 人で出発した小さな群れだったが、ウェスレーの優れたリーダーシップによって約 8 年後である 1735 年には 3 人の教授、若い司祭たちを含めて 40 人ほどの会員を持つ団体に成長していった。

(36) David Lowes Watson, op.cit., pp.182-193.

2. 連結体系 (Connexion[37])

1739 年 4 月、ウェスレーは野外説教を始めることになり、信徒の数が増えることにつれ小グループを通して彼らを養育訓練し、相互の交わり、相互責任を担うことによる体系的な小グループを組織するに至る。ウェスレーによるメソジストの組織は、既に述べて来たようにメソジスト・ソサエティー、組会、班会、選抜ソサエティー、懺悔会などであり、これらが相互に関連し合う「連結体系」[38] であった。ウェスレーにとって連結体系は、それぞれ違う地域で形成されたソサエティーや小グループが個体性を持っていたとしても、互いに相違性を持ちながらも、互いに繋がっている一つの連合体であった。それ故メソジスト・ソサエティーは、会員たち、小グループによる諸組織、説教者など三つのカテゴリーに分かれて適用されていった。このようなメソジストの連結体系は、ウェスレーのリーダーシップの中心であり、メソジストの重要な特徴であった。

基本的にウェスレーの連結体系は、次のように説明することが出来る [39]。

まず、ウェスレーにとって連結体系は宣教的であり、牧会的な必要に応じて生じたものである。つまり、彼の連結体系は、本質的に宣教奉仕のために組織された実践的なものであり、牧会的な制度であった。それ故、教会の宣教は個人と同時に社会的な聖性 (social holiness) とのつながりを持つ。神がメソジストの説教者をたてたのは、「ある教派を作り出すためではなく、国家を、特に教会を改革するためであり、聖書的な聖性を地の果てに至るまで宣べ伝えるためであった」[40] のである。

次に、ウェスレーによる連結体系は、本質的に相互人格的である。説教者たちは、ウェスレーとの連結体系を通して相互につながり、一つの体を形成していた [41]。B.E. ベックによると、連結体系は本質的に相互人格なもの (interpersonal) として会員と組織、そして説教者たちがウェスレーと繋がっており、会員たちの間も同様であった。ウェスレーは、その説教「主の山上の垂訓」（1748 年）において、「キリスト教が本質的に社会的な宗教であり、したがって、それを孤立した宗教に代えることは、それを破壊することに他ならない」[42] と、相互（社会）的な面が力説されている。さらに、ウェスレーは最初のメソジストの讃美歌の序文（1738 年）においても、モラビア派や神秘主義がキリスト教をこの世から分離させる孤立的な宗教を生み出すことに対して、

(37) これは英国式英語の表記として、アメリカの場合 connection あるいは connectionism とも表記する。
(38) これに関しては、Brian E. Back, Randy L. Maddox(ed.), Connexion and Koinonia : Welsey's Legacy and the Ecumenical Ideal, *Rethinking Wesley's Theology for Contemporary Methodism*, Nashville : Abingdon Press, 1998, pp.129-141 を参照。
(39) Ibid.,p.p.133-135.
(40) Works, vol.8, p.299.
(41) Brian E. Back, op.cit., p.130.
(42) Wesley. John(by), Albert C. Outler (ed.), *The Works of John Wesley* (vol. 1 Sermons), Nashville : Abingdon, 1984, p.533.

「キリスト教の福音には孤独な宗教は見当たらない。キリストの福音は社会的でない宗教を知らないし、社会的聖性でない聖性を知らない」[43] と批判する。このようにウェスレーの連結体系は、相互人格的な関係を持っていることが分かる。

もう一つは、組織の連結体系においてその強調点は相互の説明責任にあったという点である [44]。ウェスレーが組織したすべての集い（メソジスト・ソサエティー、組会、班会、説教者たちの集い、諸会議など）が志向した目的は、「厳格な報告」を実施することであり、組織の第一の目的は、自ら神の前に相互の説明責任を果たすことであった。例えば、ウェスレーによる連結体系の構造は、彼を中心とするアシスタント（信徒説教者）、ヘルパー、組会リーダーなどの連結であり、また、会議としてはウェスレーを中心とする年会を始め巡回区（四半期会）、メソジスト・ソサエティー、組会などの連結である。このようにウェスレーによる諸組織は、相互連結体系の状況においてそれぞれ違うレベルの霊的な指導を提供したと言うことができる [45]。

ウェスレーの連結体系は牧会的な必要あるいは宣教的な使命に対する応答として、実用的な面において発展していく。それは組会や班会、規則、讃美、説教、新約聖書の注解及び他の出版物、そして会議の体制などと共に形成され、まさにこの連結体系はメソジストの代表的な特徴であり、これを通して個人と組織による霊性だけでなく、ウェスレーのリーダーシップが具体的に発揮されたのである。

3. 霊的な指導者としての牧会的なケア

小グループにおけるウェスレーの霊性とリーダーシップについて理解するに際して看過できないのは、彼の人間への関心 [46] である。アウトラーがウェスレーを民衆神学者 [47] と呼んでいるように、彼は人々の中でも特に貧しい人々に関心を持ち [48]、霊的な指導者として牧会的なケアを実現している。18 世紀の当時、ウェスレーの小グループを始めメソジストの組織 (Society) が、他の多くのソサエティーと異なった重要な点は、あらゆるメソジストの組織は霊的な指導者であるウェスレーの直接的な指導の下に置かれており、既に述べて来たように連結体系において主に彼の指導に従う

(43) Works, vol.14, p.321.
(44) Brian E. Back, op.cit., p.134-135.
(45) Douglas S. Hardy, Spiritual Direction with a Wesleyan Ecclesiology, *Wesleyan Theological Journal*, v.41, no.1, Spring, 2006, p.156.
(46) これに関しては、Lovett H. Weems, Jr., *Leadership In The Wesleyan Spirit*, pp.13-20 と藤本満「ウェスレーによる人間形成論」（『キリスト教と人間形成』：ウェスレー誕生 300 年記念、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センター編、2004 年、142-146 頁）を参照。
(47) Albert C. Outler ed., *John Wesley*, New York : Oxford University Press, 1964, p.119.
(48) これに関しては、Jennings, Theodore W. Jr., *Good News to the Poor : John Wesley's Evangelical Economics*, Nashville: Abingdon Press, 1990. また、Lovett H. Weems, Jr., op.cit., chap.4 (Remembers Especially the Poor), pp.44-56 を参照。また、H.A. スナイダーはウェスレーの信仰復興運動が貧しい者たちのための運動であることを指摘している。Howard A. Snyder, op.cit., pp.31-38 (preaching to the poor) を参照。

人たちを中心に繋がっていた点である[49]。

特に、ウェスレーは小グループを通して互いに責任を持ち、互いにケアをするという相互牧会的なケアを大切にしていたのである。

ウェスレーは多大な時間を小グループにおけるメンバーのために割き、それぞれの真実な霊的必要に応え、細心な注意を払いながら健全な神学を教え、霊的な助言や指導にあたった。

霊的な指導者としてのウェスレーの働きが最も顕著に現れたのは、一対一で交わされる手紙であった。現在出版されている新版のウェスレー全集 (Bicentennial Edition) には、ウェスレーのペンによる三千五百通の手紙が収録されている。その手紙の数は、メソジストの組織の拡大につれ増えていくが、ウェスレーの生涯の後半を十年単位で区切ると、七十歳を超えた 1771-1780 年には千通、次の 1781-1790 年までは千三百通と、生涯で最も多くの手紙を記している。このことを通して、年齢が高齢化して巡回をこなすことが出来なくなったウェスレーが、メンバーたちの霊的な指導者として魂のケアとガイダンスのために、常にペンを執っていたことが分かる[50]。W.D. トレイシーは、ウェスレーの手紙を研究素材にした「霊的な指導者としてのウェスレー」[51]という論文の中で、ウェスレーがどれほど生涯を通して人を慰め、励まし、具体的な霊的指導をしていたのかを明らかにしている。

このような面から見ると、ウェスレーは霊的な指導者として、小グループの中にあるメンバーたちに手紙を通して、それぞれのたましいを癒し、励まし、霊的な成長を導いた、言わば牧会的なケアによる霊的な指導者としてのリーダーシップを発揮したことが分かるのである。

4. 信徒指導者の養成

ウェスレーの霊性とリーダーシップについて考える時、見逃すことができないもう一つは、彼の信徒指導者[52]の養成である。ウェスレーは、最初の頃メソジストの説教（指導）者の中で正式に按手を受けた司祭や神学訓練を受けた人が少ない状況の中で、大胆に信徒たちを霊的に訓練し、メソジストの信仰復興運動のために用いている。このようなウェスレーの行動は、英国国教会の立場から見ると規則違反であるが、メソジストの信仰運動の復興とその成果は信徒指導者の養成と活動なしにはあり得な

(49) Howard A. Snyder, op.cit, p.35.
(50) 藤本満、前掲書、168 頁。
(51) Wesley D. Tracy, "John Wesley, Spiritual Director: Spiritual Guidance in Wesley's Letters", Journal of Wesleyan Theological Societies (Vol.23, No1&2, Spring-Fall, 1988).
(52) 最初の頃、ウェスレーによって養成されたメソジスト信徒指導者たちは、アシスタント (assistant) あるいはヘルパー (helper)、組会リーダー (class leader)、管理者 (steward)、病人訪問者 (visitor of the sick)、教師 (teacher) などがある。

かったことであろう。

D.H. ヘンダーソンは、なぜ小グループにおけるウェスレーの組織がそんなに効果的であったのかという理由について述べている[53]。その中で彼は、ウェスレーのリーダーシップの原理についていくつか挙げているが、その第一番目は信徒のリーダーシップである[54]。メソジスト・ソサエティーの中で、とりわけ主な小グループである組会と班会に信徒指導者の養成がなかったとすれば、メソジスト信仰復興運動はその当時は勿論、今日のように数的にも、地域的にも世界に広がることは難しかったであろう。

ウェスレーによるリーダーシップの対象としては、英国国教会で按手を受けた司祭や信徒説教者であり、徹夜祈祷会や愛餐会、各ソサエティーや組会、班会を運営する協力者としてのアシスタントとヘルパー、さらには信仰復興運動において多大な役割を果たしたと言える女性信徒[55]の説教者たちなどがいる。特に、ウェスレーはこのような信徒指導者たちを直接に指導したのである。言い換えれば、ウェスレーは誰でも信徒説教者として立てたのではなく、彼らが伝道者として霊的な賜物を受けたことを見て、確認してから派遣したのである[56]。まさにこの点で、福音運動のために信徒説教者たちを養うウェスレーのリーダーシップが現れたのである。

L.H. ウィームズは、このようなウェスレーのリーダーシップを「多元的なリーダーシップ」(multiple Leadership) と呼んでいる[57]。当時、按手を受けなかった普通の信徒たち、まして女性の信徒たちに説教をさせたのは、決して平凡ではなかった。しかし、ウェスレーは信徒の説教者を立てて信仰復興運動に拍車をかけるだけでなく、女性の説教者たちを立てて、説教させることによって女性の地位向上のため大きな役割を果たすようになる。特に、英国の初期メソジストは女性たちによって推進されて行く。かつ女性の寡婦たちの熱心と献身が無かったとすれば、メソジストの成長はなかったであろう。英国全域に立てたメソジスト・ソサエティーを開拓し、礼拝堂を建設するのに忠実なのは女性であって、その中でも寡婦たちが多かった。彼女らは亡くなった夫の遺産を、メソジスト復興や発展のためにささげたのである。

このようなウェスレーのリーダーシップの下（連結体系）で、小グループにおいて霊的に訓練され、互いに霊的な責任を持ち、自分の役割を果たした信徒指導者たちの養成は、メソジスト信仰復興運動の主な特徴として認められるようになるのである。

---

(53) Henderson D. Michael, op.cit., pp.127-160.
(54) Ibid., pp.145-148.
(55) ウェスレーと女性あるいは女性説教者たちに関しては次の書物が参考になる。Earl Kent Brown, *Women of Mr. Wesley's Methodism* (Lewiston, New York : The Edwin Mellen Press, 1983) Paul Wesley Chilcote, *She Offered Them Christ : The Legacy of Women Preachers in Early Methodism* (Nashville : Abingdon Press, 1993).
(56) Howard A. Snyder, op.cit., p. 98.
(57) Lovett H. Weems, Jr., op.cit., pp. 59-70.

Ⅳ. 結び

これまで、18 世紀に起こった小グループ組織におけるウェスレーの霊性とリーダーシップについて考察してきた。前述したように、ウェスレーを中心とした 18 世紀の信仰復興運動は、野外説教と同時にメソジスト特有の小グループにおいて発揮されたウェスレーの霊性とそのリーダーシップによって発展してきた。その後メソジスト運動は、個人的で内面的 (inward) 霊性だけでなく、小グループの中において、さらに外に向かって社会的霊性の面においても大きな影響を与えていく。

最後に、小グループ組織におけるウェスレーの霊性とリーダーシップ内容的特徴を次のように要約することができる。

第 1 に、メソジストにおける「説明責任」は、小グループの中で互いを責任ある存在と見做し、互いの行動と生活を見守りながら、自らを神に対してかつ相互に明らかにすることである。

第 2 に、ウェスレーによるメソジスト組織の主な特徴である「連結体系」は、指導者ウェスレーを頂点とするメソジスト運動のピラミッド機構として霊的な指導の基盤となる。

第 3 に、霊的な指導者としてウェスレーの牧会的なケアは、当時の信仰復興運動に大きな影響を与え、さらに信徒指導者たちの養成を通してウェスレーによるメソジスト信仰復興運動は豊かな実を結ぶ結果となったのである。

今日メソジストが全世界に広がっているのは、小グループ組織におけるウェスレーの実践的な霊性とリーダーシップの成果によるところが大きいと言えるであろう。また、このような小グループにおけるウェスレーの組織的な霊性とリーダーシップは、まことの霊性とリーダーシップが失われつつある現代の教会において一つの示唆を与えているのではないであろうか。